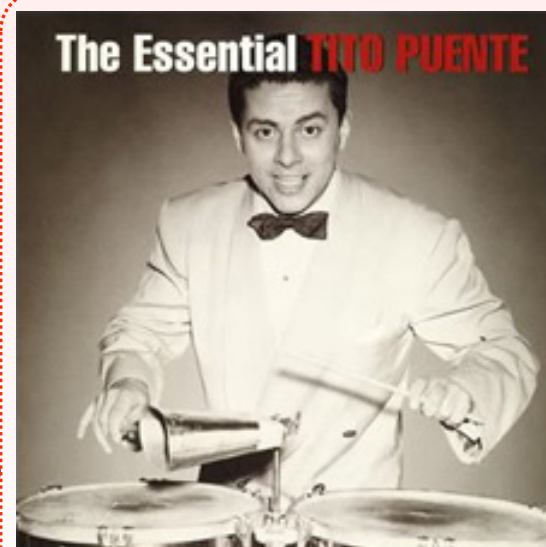


~play list~

0. The Opener / Just Like Magic / LP Ventures LPV470 / 1979
1. Ran Kan Kan / The Essential Tito Puente / BMG 3226-2-RL / 1949 *
2. Pa' los Rumberos / Cuban Carnival / BMG Japan BVCJ-37437 / 1956 *
3. Que Sera / Cuban Carnival / BMG Japan BVCJ-37437 / 1956
4. Mambo Gozon / Dance Mania / BMG Japan BVCJ-37436 / 1957 *
5. El Cayuco / Dance Mania / BMG Japan BVCJ-37436 / 1957 *
6. Four by Two / Top Percussion / BMG Japan BVCJ-37438 / 1957
7. Yambeque / Cuban Carnival / BMG Japan BVCJ-37437 / 1956 *
8. Pa' Lante / ditto / Tico SLP1214 / 1970?
9. Lindo Palomar / Pa' Lante / Tico SLP1214 / 1970?
10. Para los Rumberos / ditto / Tico SLP1301 / 1972
11. Tratame como Soy / Homenage a Beny vol. 2 / Tico JMTS1436 / 1979
12. La Leyenda / The Legend / Tico JMTS1413 / 1977
13. Oye Como Va / El Rey Bravo / Tico SLP1086 / 1963 *
14. Old Arrival / Master Timbarero / Concord Picante CCD-4594 / 1993



* are included;
The Essential Tito Puente
BMG Japan BVCJ-37487/88

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄2～TITO PUENTE～ by Willie NAGASAKI on July 13, 2008



0. The Opener

TP、パタート、ジョニー・ロドリゲス、ステイーヴ・ベリーオス、エディ・マルティーネス、サル・クエバスらで編成されたLPJEのスタジオ録音盤。文字通り、そのオープニングを飾る曲。オン・マイクな収録が衝突音も捕らえており、パーカッションの生々しさが味わえる。クエバス～マルティーネス作。1979年録音。



1. Ran Kan Kan

ティンバーレスの音を擬音語化した、TP初期の傑作。カスカリータの口癖を拝借したらしいが、演奏技術で魅せるTP楽団のあり方は全くのオリジナルだ。ヴォーカルはビティン・アビレース、ピアノはルイス・バローナ。1949年録音。

←1992年の米BMGによるリイシュー。



2. Pa' los Rumberos

RCAに復帰してからの初オリジナル・アルバム。チャチャチャを消化し、ボビー・ロドリゲス～パタート入団から一年ほど経ったTP楽団入魂の演奏集。「パ・ロス～」はタイトル意が信じられない快速激烈なテンポ、スピード感。コール&リスponsとブリッジだけの構成。クラーベ入り。1956年録音。



3. Que Sera

「パ・ロス～」から続くチャチャチャ。フルートの音色を活かした軽やかな、そして流れるような加速感あるナンバーで、フルートを吹くのはジェリー・サンフィーノ。1956年録音。

←1990年の米BMGによるリイシュー。このシリーズで録音データが初めて明確になった。

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄2～TITO PUENTE～ by Willie NAGASAKI on July 13, 2008



4. Mambo Gozon

TP楽団の金字塔『ダンス・マニア』のB面トップに収録。パーカッション～ホーンズともアンサンブルの精度が非常に高く、それでいて目いっぱいでない余裕度に脱帽する。テンポがかなり速いが、丁寧な迫力というか、乱れが全くない。超クール。1957年録音。



5. El Cayuco

TP楽団の金字塔『ダンス・マニア』のA面トップのチャチャチャ。久しぶりのヴォーカル入りアルバムだが、サンティートスのこの声が、この後のTP楽団のトレードマークとなった。分離が美しいアバニーコ(ロール)！1957年録音。

“Dance Mania” Is

introduced by

“1001 ALBUMS You Must

Hear Before Die”



6. Four by Two

モンゴ、ボボ、フリート・コジャーソ、フランシスコ・アグアベージャらルンベロを招集し、A面サンテリア／B面創作ラテン・パーカッション・アンサンブルと構成。米メジャーとしてはクレイジー。マルセリーノ・ゲーラ、メルセディータス・バルデス参加も奇跡的。エバリスト・バローはアルセニオNYバンドのベースト。

Copyright: マンボラマTokyo



7. Yambeque

『キューバン〜』B面トップ。プログレッシヴ・マンボの典型例にして傑作。重層的なホーン・リフがパーカッシヴに進行し、リズム・セクションと対峙する。サックス・ソロが絶妙なタイミングで入るあたりもスリリング。1956年録音。

←ヘンなジャケのフランス盤。70s?

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄2～TITO PUENTE～ by Willie NAGASAKI on July 13, 2008



8. Pa' Lante

A面トップに収録された
モントューノ。TPにして
みれば、チャチャチャ以
前に自己のオーケスト
ラでやっていたコンフ
ント型ソンのセルフ・リメ
イクだったはず。猛烈な
パフォーマンスはファニ
ア勢への牽制だろう。
ジャケットではLP社ロ
ゴが目立っている
が…。ルディ・カルサド
作。1970年代初頭録
音。



9. Lindo Palomar

同アルバムB面トップ
のルンバ。ノライダ・エ
ルナンデス作曲。イント
ロのベース・パタンが
ルンバ。TP長尺ソロ！

このほかにも、ラテン・
ソウル「Hit the
Bongo」、オンダ・ヌエ
バ「アラキータ」、晩年
のライブ盤で取り上げ
られたチャーミングなソ
ン・モントューノ「Mi
Jevita」など多彩で充
実したアルバム。



10. Para los Rumberos

サンタナのブレイクを
受けて、かつての激烈
ナンバーをリメイク。冒
頭に、あのイントロが
付加され、ティンバー
レスのソロとともに”さあ、
いくぞ！”と気合が入
る。サンタナ路線では、
「Batuka」のカヴァーも
披露。エール交換の様
でもあり、葵の印籠の
様でもある恐るべきア
ルバム。1972年発表。



11. Tratame Como Soy

『The Legend』で復活し
たTP楽団はかつての
勢いを取り戻し、さらに
ファニアのスター歌手を
はべらせた『Homenaje
a Beny』で貫禄を見せ
つけた。偉大なるベニ
に捧げた『Vol. 2』の冒
頭曲。「フランシスコ・ワ
ヤバル」をブリッジにし
て、歌手がアダルベル
ト～イスマエル～エクト
ル～セリアとリレーされ
る。1979年発表

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄2～TITO PUENTE～ by Willie NAGASAKI on July 13, 2008



12. La Leyenda

冬の時代を乗り越え、ルイ・ラミーレス製作でキング復活を宣言した名盤。ファニアによるティコ買収の成果は、この一枚で充分だ。このヴォイスिंगは、往時のTPに楽しんできたファンには衝撃だったに違いない。ティンバリートスも炸裂！1977年発表。



13. Oye Como Va

チャランガのブームが頂点に達した1962年、チャチャチャ・インヴェンジョンの1954年にですらストリングスを導入しなかったTPが、満を持して発表したチャランガ・アルバム。フィーチャーされているのはプピ・レガレータ。この大ヒット曲、キューバ伝統のリフを拝借したオマー・ジュなのだ。1962年録音



14. Old Arrival

ピカンテでオケ、トロピジャズでコンボを使い分けていた後期コンコード・ピカンテでの最高傑作。作者ヒルトン・ルイスはコンボのピアニストだった。『カジェ54』に収録されたヒルトン初期の大傑作「New Arrival」と対を成すハードボイルドな曲。緻密なアンサンブル。1993年録音。



Appendix

a	d
b	c

- a. 『The Legend』に続くアルバムで、ベニへのオマージュ・シリーズの第一弾。グラミー受賞。
- b. c. ボビー・ロドリゲスとパタートを得て、1956年にラテン・パーカッション+ベースだけのレコード。初回ジャケットとルーレット傘下になった1957年ジャケット。d. は『レジェンダ』と『オメナーヘ1』に挟まれた1978年リイシュー。

ティト・プエンテ、本名アーネスト・アンソニー・プエンテ・ジュニアは、プエルトリカンを両親に1923年4月20日ニューヨーク・ハーレム病院で生まれた。スパニッシュ・ハーレムで育ち、家族とはスペイン語、街では英語で会話していた。早くから音楽的才能を示し、サックスやドラム、ピアノ、それにダンスを習った。11才頃には、近所の仲間とバンドを始め、学校や地元のパーティ会場で演奏していたという。プロとしての最初のギグは、13才のとき、ラモン・オリベイロ楽団のメンバーとしてだったようだ。本格的なプロとしての活動は、1939年に出逢ったキューバ人ピアニスト：ホセー・クルベーロのUSツアーに参加したときに始まる。次いで、ノロ・モラーレス、マチート両楽団の打楽器奏者としても活動した。すでに編曲も行っていたらしい。1942年から約3年間はUS海軍に兵役、帰還した1945年から47年まで、その報奨金を使ってジュリアード音楽院でオーケストレーションなどを学んだ。復帰後はニューヨークに活動拠点を移したホセー・クルベーロ楽団に再び参加したり、いくつかのバンドに参加した後、ティンバーレス奏者／アレンジャー／音楽監督としてプピ・カンポ楽団に迎えらる。編曲／演奏共に新たな局面を切り開いた感のあるカンポ楽団だったが、ラテン音楽プロモーターの草分け的存在のフェデリーコ・パガーニと出逢い、ジミー・フリサウラら数人のメンバーをカンポ楽団から借り受け、1948年から自身のオーケストラでも活動し始めた。最終的に、自身の楽団ザ・ピカディリー・ボーイズを1949年に結成し独立した。